広イセカイと狭イテノヒラ

北田　龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
広イセカイと狭イテノヒラ

【Ｎコード】
Ｎ７４３９Ｏ

【作者名】
北田　龍一

【あらすじ】
「少女」は、彼のようになりたいと願った。「異端」は、歪な人を憎んだ。「罪人」は、償うべきだと自らを律した。「凡人」は、平凡に生きていることを嫌った。「混血」は、ただ世界に震えた。「騎士」は、己の師を超えることを望んだ。「鬼」はすべてを見守ると決めた。
これはそんなモノたちの、日常と、非日常の物語。
……初の投稿となるので、拙いところもあると思いますが、どうか楽しんでいってください

一章　桜の散った学園にて（前書き）

はじめまして？　作者です
今回が初投稿となるので、いろいろ見づらいかもしれません。
また、小説ド初心者なので誤字脱字などがある可能性があります。
なので、生温かい目で見ていただければ幸いです
あと、まずいないと思いますが、「この小説見たことあるような……？」という方は、あとがきを見てくださいね
さて、前振りが長くなりましたが、そろそろ本編始めます～
どうぞ！

一章　桜の散った学園にて

「彼」に会ってから１０年以上たった
それ以来一度も会ってない
だって、「彼」と私は他人だから
「彼」はもう、私のことなど忘れてしまっているのかもしれない
私も記憶が曖昧で、よく思い出せない
それでも「彼」を探したい
会って、「彼」に私の――

＊＊＊

若葉のみとなった桜が下校していく生徒たちを見下ろしていた。
少しだけ赤みのかかった日差しが、学校全体を包み込む。
その校舎の窓辺に一人、男子生徒が目を閉じて座っていた。
すう、と背筋を伸ばし膝に手を置いたままで。
彼がもし座禅を組んでいれば、瞑想に見えただろう。慰霊碑の前だったなら、黙祷を捧げているように見えたかもしれないが……しかし、彼は何者にも祈りを捧げてはいない。誰もいない教室で凛と、眼を閉じたまま座っていた。
その空気を――静寂を破るように、教室の戸が開かれる。
現れたのは別の男子生徒。気まずそうに、困ったように扉をあけた。
「私に何用だ？　先に言っておくが、荒事は先週やったので断るぞ」
座っていた男は振り向きもせず、ゆっくりと目を開いて答えるのであった。

＊＊＊

彼が扉を開く前、ホームルームの鐘が鳴ったころ
授業から解放されたクラスメイトを尻目に、彼は――大仏駿也（おさらぎしゅんや）は悩んでいた。
食堂で昼食を摂ろうと廊下を歩いていたところ、必死になって部員勧誘をしている女子生徒を見つけたのが、この悩みを抱えるきっかけである。話を聞いてみるとどうやら彼女はオカルト研究部の者で、このままだと部員の数が足りないため部がとりつぶされてしまうらしい。
彼女を助けるために、とりあえず自身は入部することに決めたのだが、それでも人数が足りない。友人に当たってみたものの――ことごとく断られてしまった。
既に駿也は二年生。大半の者は他の部活動を行っているため、協力しようにも時間がとれないとのことでだめだった。時間に余裕のある帰宅部の人間にも声をかけたが、「オカルト研究部」と聞いた途端みな敬遠してしまう。誰一人新入部員をつれていけないまま、ホームルームが終わろうとしていた。
ただ……まだ同学年で一人、誘っていない人物がいる。何故声をかけなかったかというと、彼を誘っても断れると思っていたし、何より彼は有名すぎたからだ。
その人物の名は、「酒月（さかづき）　日明（あきら）」という。付いたあだ名は「鬼神」、「現人神」「生きた図書館」など他多数があり、挙げていたらきりがないだろう。喧嘩は無敗。昔、日明一人に対して四十人ほどが集まり戦いを挑んだにもかかわらず、日明はその四十人を一人残らず蹂躙したらしい。他にも、ほとんど机に突っ伏しているにもかかわらずオール5だったりと、頭もどうかしているんじゃないかと言われている。彼は昔、さまざまな部に入って活動していたのだが一か月と経たないうちにやめてしまい、今はたまに助っ人として動いているようだ。理由は「真剣にやれるほど興味、及び関心を持てない。要するに飽きた。たまになら協力してもいい」と言っていた。
一年生の時、日明とは同じクラスでよく話をしていたが、正直な所、

日明が部に入ってくれるとは思っていない。彼は関心のあることか、利益になること以外は行わない性格なのだ。彼の姿を何度も見ているので、駿也はそのことを理解している。しかし何もせずに諦めることもできず――下校していく生徒の流れに逆らうように、日明のクラスに足を運んだ。

物音ひとつない教室に、開かれた戸の音が反響する。窓際の席で、目を閉じて座っている人物が目に入った。彼の髪はやや乱れているが、それとは対照的に制服は乱れ一つない。

間違いない。彼こそ酒月　日明だ。

「私に何用だ？　先に言っておくが、荒事は先週やったので断るぞ」

彼が言葉を発した瞬間、教室の空気が変質した。急に重みを持ったように、ソレは駿也にふりかかる。ただの『気迫』なのだが、顔を見ていないのに駿也は僅かに気圧（けお）された。

「……相変わらず威圧するんだな、日明」

最も駿也はこれに慣れているため、多少なら問題ない。今のは強面の人と対峙した時ぐらいの重圧だろう。平穏な空気に比べれば重いが、殺気まではいかない。

「相手がどれほどの覚悟で私に頼みに来たのかがわかるからな。まぁ、貴殿は慣れている故（ゆえ）あてにならんが……何用だ？　駿也」

顔を見ずに名前を当てたり、言い方が古くさいかったりと、日明の感覚は常人とはだいぶ離れている。どこの武士だよ！？　と内心つっこみつつ、一息ついてから駿也は本題に入った。

「ある部活に入って欲しい。ずっといなくてもいい！　とりあえず今のままだと部が潰れちまうから、人を集めねぇとってだけだ。オレも入ることにしたんだけど、それでも人数が足りなくて……」

ふむ……と日明は思いふける。少しの沈黙を経て、困惑しながら彼は言った。

「いったい何部だ？　早急に部員を追加しなければならない部は、私の記憶にはないのだが……」

「オカルト研究部だ。日明が知らないのも無理ないぜ？　オレも今

日、声かけられて初めて知った」
渋面のまま、日明は言う。
「初めて知った部にそのまま入るとは……誘ったやつが駿也好みだったのか？」
「違げぇよ。放って置けなかっただけだって」
淡々と答える駿也に、暁が薄く笑った……ような気がした。
傍から見たら、口を吊り上げているようにしか見えないだろう。少しも付き合っていなければ、警戒したかもしれない。歪な表情ではあるが、普段あまり感情を表に出さない日明の数少ない「表情」だ。ちなみにこの表情は軽くからかっているか、少しふざけているかである。
「無意識に好きになっているのかもしれんぞ？　始めはそんなもんだ」
「興味ないんだけどな……そういうの」
二の句を継ごうとして、駿也は話が逸れていることに気がついた。こんな話をしに来たのではない。風呂から出た犬のように首を振ったあと、改めて日明に頼んだ。
「それはともかく暁、オカルト研究部に入って……」
「了解した。では案内を頼む」
即答で了承する日明。
「そうだよな。やっぱ無理……っていいのかよ！？　ちょいと怪しい部だぜ！？！？」
てっきり断られると思っていた駿也に対し、日明は憮然と答える。
「少し怪しいぐらいがちょうどいい。面白そうだ。お前の嫁に会うのも楽し……」
「その話から離れろおおぉぉぉ！！」
廊下にも間違いなく聞こえるであろう大音量だったが、幸いにも周囲に人気はなかった。聞かれていたら、あっという間に野次馬に取り囲まれていただろう。
一方日明は、「そこまでムキになることも無かろう？　照れ隠し

か？」と、冷静に切り返す。……どうやら、彼は本気で言っているようだ。
　ここで言い合っても埒があかないので、部室である生物実験室に日明を案内しながら、二人は話を続ける。だが、話題は嫁がどうとか、恋とは何ぞやらなど、男女関係に重点を置いた話題から離れることはなかった。それを必死になって否定する駿也の胸中には、いやな予感がしてきている。
（あの娘に会わせても大丈夫か？　日明はこの手の話題振らないだろうな！？）
　残念ながらこの勘は、後に大当たりしてしまうのである。

＊＊＊

　桜谷高校、東棟二階――
　そこには、二つの実験室がある。
　一つは化学薬品や実験器具が置いてある化学実験室。もう一つは、ホルマリン漬けや骨格標本などが立ち並ぶ生物実験室だ。
　放課後の東棟にはあまり人気がない。実習室しかない棟のため、吹奏楽部が音楽室を使うぐらいしか、人が来る理由がないのである。だが今日は……二階廊下の突き当たりにある生物実験室の電気がついていた。もちろん、誰かの消し忘れではない。室内には、女子生徒が二人いた。そのうちの一人が、不安そうに、どこか苛立ったような声を発する。
「遅いですね……何かあったのでしょうか？」
　険の強い声色と、第一ボタンまで締められた半そでのワイシャツ。もちろんスカートも長めである。身長は女性にしてはやや高めで、百七十センチはありそうだ。顔には黒縁メガネをキリッとつけている。彼女の姿を一言で表すなら、「メガネ委員長」と言ったところだろうか。
「きっと他の生徒さんたちにも声をかけてくれてるんですよ～あせ

っちゃダメダメ」
　もう一人の彼女は、メガネ委員長とは対照的に明るく楽しげで、それでいて周囲の人間を和ませる雰囲気を持った声だった。
　緩やかなウェーブの掛かった茶髪に、大きな二重の瞳。寝癖をそのままで来たような乱雑で、どこか稚気を含んだ髪形。肌は陶磁器のように白く――はないが、年相応には艶めかしい。
「それにその先輩だけじゃ人数が足りてないんでしょ？　だったらここは、レッツ希望的観測！！」
　それでいて軽い天然とも取れるこの言動。大半の男は一週間ともたないだろう。メガネ委員長の知るよしもないが、彼女はまだ入学して一カ月ほどにもかかわらず、既に三回ほど告白されている。もちろん結果は全員玉砕だ。
「それは、そうなのですが……」
　彼女の言った人数が足りてないとは、部活動に最低限必要な頭数のことである。
　現在オカルト研究部には三人所属している。堂々と希望的観測を宣言した「木下（きのした）　カエデ」と、メガネ委員長こと「岩上（いわがみ）　綾花（あやか）」残り一人は、去年まで部活動を行っていた三年生の先輩である。この先輩は実質名前だけで活動するつもりはなかったのだが、綾花が何度も頭を下げてなんとか部に残ってもらっている。しかし、このままでは二人足りない。最低でも部として動くには、五人以上でなければならないというのが本校の校則なのだ。
　昼休みに一人だけ、入部してくれるという先輩がいたのだが、その先輩はまだ来ていない。時間はもう四時過ぎで、とっくの昔にホームルームは終わっていた。忘れられたのかもしれないとも思っているが、それでも綾花は諦めたくなかった。
「そういえばカエデさん。どうしてこの部に入部しようと思ったのですか？」
　不安を紛らわすようにカエデに声をかける。もちろん、純粋にカエデの入部理由を聞きたいというのもあった。

「ん～誘っている綾花ちゃんがあまりにも健気だったもので、つい入っちゃった」
どこか子猫を思わせるしぐさで無邪気に答える。その動作は同姓の綾花も、思わずドキリとしてしまうような可憐さを漂わせていた。
「そんな理由でいいのですか？　まあ、私としてはありがたいのですが……って聞いてます！？」
綾花が怒る理由。それはカエデが全力でそっぽを向いていたからだ。気がつけば、廊下のほうに注意を向けていて、こちらの話は全く聞いていなかった。
そしてカエデは唐突に一言
「……こっちに誰か来てる。一人じゃなさそうね」
「え？」
あまりに突拍子過ぎる発言に、綾花の思考が停止する。発言そのものも突拍子だったが、なにより今の口調は彼女らしくなかったような気が……
「遅れてきたバツゲェェェェーム！　必殺黒板消し！！」
そういうとカエデは軽い身のこなしで引き戸に近づき、黒板消しを挟み込む。ヒーロー番組の悪役がワナしかけたような笑みをこぼしていて、ご満悦の様子だ。それと同時に、誰かの足音が廊下側から綾花に聞こえ始めた。
……先ほど違うように見えたのは、綾花の気のせいだろう。
「さあ先輩方、肺に悪いチョーク粉の黙示録に恐れ慄くがいい！」
「後でどうなっても、私は知りませんよ？」
コツコツと廊下に響く足音を気にしながらも――正確にはこの後の顛末を予測しながらも、綾花は放っておいた。
一方カエデは、今度はタフガイのように渋く言い放つ。
「フッ、これぐらいはご愛嬌さ……それに、この程度のブービートラップに引っかかるようなアマちゃんじゃあ、この先の戦場を生き残れない……これに引っかかった暁（あかつき）には、潔くこの部から身を引いてもらうぜ！」

「戦場ってどこですか！？　というか部員数が減ってしまったら本末転倒でしょう！」
「やーそうだったね～ゴメンゴメン。今のナシ！　取り消します！」
そうこうしているうちに――扉が開かれ、黒板消しが落下した。
入ってきた先輩は何の警戒もしていなかったようで、頭の上にポス、と見事なまでに黒板消しが直撃。少しの間、呆然として……
「なんじゃこりゃぁぁぁぁ！？」
と古臭いリアクションを決める。そして、お気の毒な先輩の裏にいたもう一人が、唐突に顔を出してつぶやいた。
「気がついていなかったのか……しかしこの程度で良かったな。ここがもし戦場だったら、今ごろ貴殿は木っ端微塵だぞ？　駿也」
なんとなく、軽いデジャヴ。原因はこれを仕掛けた天然娘（カエデ）との会話のせいだろう……。
「気づいてたなら教えてくれよ……」
一方、黒板消しを食らった先輩の頭は見事にスノーマン化。どんよりと重い空気を周辺に漂わせていた。
それに対して、
「Ｙｅｓ！！　クリティカルヒット！」
この程度のブービートラップ、と言っていたわりにカエデは大はしゃぎで、ガッツポーズをきめている。先輩を舐めているのか、あるいは根っからの天然なのかよくわからない言動だが、おそらくは後者だろう。
静かに片手を掲げてカエデは続ける。
「この出来事はオカルト研究部員の魂に強く刻まれ、未来永劫語り継がれるだろう……！　そう！！　『オカ研の雪男（イエティ）』として！！」
「意外と普通だな……とはいえ、そんなあだ名で呼ばれたくはないが」
「どこが普通か説明してくれ日明！！」
初対面で悪ふざけしたにもかかわらず、カエデと先輩達の会話は弾んでいる。悪い傾向ではないと思うが、しかし……綾花にとって、

この展開は腹が立った。
　既に時刻は四時二十分を過ぎていた。あまり遅くに帰りたくはないし、何より部活届けを受け付ける時間は五時までだ。なんとか人数は揃ったのだが、やらなければならないことはいくらでもある。にもかかわらず……三人で和気あいあいとしているのは気に入らなかった。そんな綾花の心情もお構いなしに、三人は話を続ける。しばらくは綾花もこらえていたが……すぐに爆発。身近にあったテーブルに腕を叩きつけた。
　走る衝撃。硬直する三人。そして綾花は叫ぶ
「いつまで三流コントをしているのですか！　ここは漫才部ではありませんよ！？　それに、ただでさえ先輩方は遅れてきて時間が押してるのです。無駄話はあとにして、部のことを優先してください！！　部活届けの受付時間が過ぎてしまったらどうするんです！？」
「ひえっ！？　綾花ちゃん怖っ！！」
「わ、悪ぃ……」
唐突に放たれた咆哮に二人は身を震わせた。
しかし先輩の一人は、
「……確かにそのとおりだな。失礼した。では、我々は何をすればいい？」
　淡々と物怖じせずに答えた。その動作は全くといっていいほど落ち着いていて、恐ろしいほど――何の動揺もせず、どこか感情が欠けたような表情だったが――理性的な空気をかもし出していた。彼に促され、綾花は口を開く。
「とりあえず、副部長を決めなければいけないので、まずそのことを話しましょう。そのあとで、先輩方にはこの紙に名前を書いてもらいます」
　そういって懐から「入部届け　オカルト研究部」と書かれた紙を先輩たちに差し出した。
「ちょっと待ってくれ。副部長の前に部長を決めなきゃいけないだろ。でも、その前に自己紹介しないか？　相手がどんなやつなのか

もわからないのに、部長とか決めるのはちょっとな……」
未だに残る白い粉を振りまきながら、先輩の一人が言う。そのとおりだと綾花は思ったが……もう誰が部長をやるかは、彼女の中では決まっていた。
「部長は私がやります」
生意気かと思われるかもしれない。何か言われるかもしれない。それでも……この役目は自分がするべきだ。
でなければ、私は「彼」に顔向けができない。
「「え！？」」
「理由を聞きたい」
動揺するカエデとスノーマン先輩に対し、やはりもう一人の先輩は冷静だ。淡々とこちらに問いかけてくるその姿は、ぎこちない機械のようにも見える。
（一体何なのでしょう？　この人……）
彼から奇妙な違和感（プレッシャー）を感じたがそれは問題ではない。綾花は自身を落ち着かせてから、ゆっくりと理由を述べた。
「この部を維持したいと積極的に動いたのは私です。先輩方やカエデさんは……私が行動を起こさなければ、この部には入らなかったでしょう。ですから、私がここで責任を取らないと……つまり部長にならないと筋が通らない。と思いませんか？」
視線を外さずに、彼としっかり向き合って答えた。
「……驚いた。政治家が堂々とマニフェストを曲げる時代に、未だに道理を通そうとする者がいるとは……」
その時の彼の変化は、何と言えばいいのだろうか？　口調は少しばかり柔らかくこそなっていたが、表情が……誰がどう見ても“顔を歪めて”いたのである。思わず綾花は半歩後ろに下がり、先輩を警戒する。カエデは大丈夫だろうかとそっと視線を移すと……何故か彼女は柔らかい笑みを浮かべていた。
そして、綾花にとって信じがたいことを口にする。
「綾花ちゃんよかったね！！　先輩に褒められよー！！　じゃあ先

輩、綾花ちゃんが部長になることに賛成ですか！？」
「そう思ってもらって構わない。貴殿には聞くまでもなさそうだが……駿也はどうだ？」
あっさりと先輩は綾花を褒めたことを認め、スノーマン先輩にも意見を求めていた。
（今の表情で褒められたと言われても、わからないですよ！）
内心怒りを覚えながらも、そこでふと気がつく。
なぜカエデは、彼が『褒めている』ということがわかったのだろう？
「俺も異議なしだ」
彼を連れてきたスノーマン先輩が動揺していないのは分かる。声をかける間柄なのだから、つきあっているうちに解るようになったのだろう。カエデと先輩は知りあいなのだろうか？
「というわけで、オカルト研究部の部長は『岩上　綾花』に決まりました～！！」
しかしカエデの性格を考えると、知っている人間だったらすぐに声をかけそうな気も……
「あ・や・か・ちゃ～ん！！　聞こえてる！？」
「え！？　すいません、考え事をしていて……何を話していたのですか？」
どうやら気づかないうちに話が進んでいたらしい。先ほどのこともまだひっかかっていたが、それよりも今は部のことを優先するべきだと自身に言い聞かせて、もう一度何の事を話していたかを聞いた。
「部長はまかせたって話をしてた。もしかして日明の表情がわからなくて混乱した？　あいつは表情を作るのが苦手みたいで……俺も最初は戸惑った」
言っていることは理解できた。できたのだが……今の会話の中にある人物の名が含まれていたせいで、綾花はさらに混乱していた。
「あの、先輩。少し気になったのですが、アキラってまさか……あの人じゃないですよね？」

表情が欠落していて、男性な上に名前が「アキラ」
その人物には一人心当たりがある。この学校の生ける伝説と化していている男とぴったり一致していた。偶然の一致と思いつつも――こんな辺境の部に来るはずはないと思いながらも――恐る恐る、先輩に聞くと、
「たぶん想像どおりだと思う。クラスメイトや友人に声をかけたけど、入ってくれるやつが日明だけでさ。でも、噂ほど物騒なヤツじゃないから。日明独特の動作とか雰囲気があって、慣れるの大変だとは思うけど」
さらりと先輩は答えたが、綾花は動揺を隠せない。
（無理言わないでください。あの『鬼神』が目の前にいるんですよ！？）
噂によるとたった一人で百人を戦闘不能にしたり、彼を不意打ちした者の骨をあっさり折るなど、人間離れした能力を持っている上に残虐非道と聞いていた。今までの言動を見る限り、噂よりはまともそうだが……
「正体を知った途端警戒か。しかしさほど怯えていないあたり、なかなか精神面（メンタル）は強いようだな。それとも、大した噂を聞いていなかったか？」
半ば呆れたように、しかしさほど気を悪くした様子もなく『アキラ』は答える。
だが下手に機嫌を損ねれば、何をされるかわからない。彼と対峙しているという衝撃に揺られながらも、綾花は慎重に言葉を紡ぐ。
「一応、あなたに関するうわさは聞いています。どうしてこんな部に？　あなたは確か、すべての部に入部したのち退部したと……」
「ところが、すべてではなかったようでな。この部はまだ入部していない故、どんなものかと思ったのだ。まあそれ以外の理由として、駿也の見初めた相手がどんなものかと知りたかったのもあるのだが……」
「は？」

前者は彼の逸話のうちのひとつだ。それなら……それだけならまだ、綾花は動揺せずにこの話題を終わらせることができたのだが、『見初める』という言葉を放っておくわけにはいかなかった。

この発言のあと、ある人物がとたんに顔を白黒させ……そして、慌てて弁解を始めた。

「っつ！？　だから違うって言ってるだろ日明！！　無視されるこの娘を見ていられなかっただけで……」

必死に話すスノーマン……またの名を駿也だが、最後の発言は十分「惚れたから」と、とられる言葉だろう。案の定、綾花は赤面しながら絶叫する。

「は、ははは、はははは破廉恥な！！！！　そんな下心をもってこの部に入部したのですか！？！？！？」

正直なところ、「帰ってください！！」と二の句をつぎたい綾花だが、部員の数が定員ギリギリのためなんとか堪えた。ここで本当に帰られたら元も子もない。

羞恥と怒りで真っ赤になる彼女を見て、どこか残念そうに日明がつぶやく。

「そこまで拒絶されるとは……相性も悪くないと思ったが、どうやら彼女の心には先客がいるようだぞ？　せいぜい泥沼化しない程度に横恋慕しているがいい」

「……お前、半分遊んでいるだろ……？」

「失礼な。鮮血の結末に巻き込まれないように忠告したつもりである。そのように言われる謂れはない」

「話をこじらせといてよく言う……！！」

わなわなと握りこぶしを振るわせる駿也。

この混沌とした教室に――

「Ａａａａ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

更なる混沌が、訪れた。

三人が慌てて振り向くと、先ほどの綾花とは逆に真っ青で叫んでいた、「木下　カエデ」がいた。

「今何時！？　だいたいね～とかはなしの方向で！　ホントに何時！？」

「今は四時四十分二十秒三てん……」

「そこまで正確じゃなくてもいいですよ先輩！！　どーしよ……急がないと閉まっちゃう！！」

「だいたいが駄目というから正確に言ったのだが……」

微妙に落ち込んでいる日明を尻目に、カエデはさっさと荷物をまとめて走り出した。

「急にどうしたのですか、そんなに慌てて……」

「私、一人暮らしなの！　それで、今日中に銀行にいってお金をおろさないと、生活できなくて、その銀行は五時までしかやってなくて！！　というわけでとにかくサヨナラ！！」

よっぽど慌てているのだろう。支離滅裂になりながら、彼女はそれだけ言って出て行ってしまった。

「待ってください！　副部長と自己紹介は！？」

綾花も引きとめようとしたが、あっという間にカエデは小さくなって見えなくなった。

「自己紹介をしたいなら……カエデさんだっけ？　あの子に追いついて、その後に帰りながらすればいいんじゃないか？」

「で、でも副部長は……」

「私がやろう。一年間この部に拘束されるのは不服だが、他に入る部もない故、特に問題なかろう」

駿也がさらりと提案し、日明がしっかりと綾花に答える。会話をしながらも、日明は部員用紙に記入を始め、駿也もそれに続く。

「不服といいましたけど……副部長になったからには、しっかりやってもらいますよ？」

からりとヘンが転がり、日明が駿也の紙を受け取った。
「問題ない。――部長殿、貴殿の用紙を渡してもらえるか？　私が職員室に出してくる。貴殿らは先にカエデのもとに行け。私は後から行く」
綾花は自身の紙と、あらかじめ預かっていたカエデの用紙を懐の内ポケットから取り出した。
「大丈夫ですよね？」
紙を彼に渡しながら、静かに綾花は問いかける。
なりゆきとはいえ「鬼神」と呼ばれた男を副部長にするのだ。抑えがたい不安と、拭いきれない恐怖が、その言葉を紡ぎだしたのかもしれない。
それを悟ったのか……男は、ほんの少しだけ抑揚を込めて言った。
「恥になるようなことはしない。安心しろとは言わないが、道理を通そうとしている者に手は出さんと言っておこう」
そう言って日明は紙を受け取り、職員室へと向かう。
「おれたちも行こう」
「ええ！」
綾花と駿也は、下駄箱へと駆ける。
こうして慌ただしく、放課後は過ぎていく――

一章　完

一章　桜の散った学園にて（後書き）

どうも、作者です。
しかし、どうしたものですかね。実はあとがきを書くの初めてなんですよ。こんなあとがきでいいのかな～と思いながら、でもやっちゃいます。
作者はあとがきのモラルっぽいものを生け贄に捧げ、作者の脳内世界とあとがきをつなぐ『ピンク色の四角いドア』を発動！
この効果により、作者の脳内世界から『岩上　綾花』をここに召喚！
ギィィィィ……（扉の音）
綾花「作者さん、呼ばれていきなりなんですが……このあとがき、大丈夫ですか？　ネコ型の機械人形に拉致されたり、王様に心を砕かれても知りませんよ？」
作者「そしたらある意味貴女も道連れですね（笑）」
綾「笑いごとじゃありません！　ただでさえ、あなたはこの部に入部してから小説を掲載したのがこれが初めてなんですよ！？　もう入部して一年もたったのに……」
作「す、すいません……ネットやったり、ゲームやってたり小説読んでたりで進まなくって……」
綾「つまりグダグダだったってことですね？」
作「ひえっ！？　綾花ちゃん怖っ！」
綾「それはカエデさんのセリフです！　男のあなたが言っても気持ち悪いだけですよ」
作「い、いやハンター稼業に手をだしたらハマってしまいまして……ちなみに名前は「ｋｒａｆｔ」です、ガクホで見かけたらよろしくお願いします」
綾「社員ですかあなたは。もうあとがきも既にぐだぐだですね……」
作「これくらいぐだぐだの方が会話っぽいですってきっと。しかし、

こうも私からかけ離れるとは思いもしませんでしたね～」
綾「何が言いたいんですか。それだけじゃ伝わりませんよ？　後半の文章みたいに、描写不足にならないでください」
作「慌てて書いたんだから仕方ないじゃないかー！　まあ、それはおいといて、先の発言ですが、メインとなったキャラたちには、『作者』の思想がかなり反映されています」
綾「それってどの小説でも同じことだと思いますけど？」
作「それもそうなんだろうですけどね～メインキャラのみなさんには、私が重要だと思っている精神の部分を組み込んでいます。もちろん、一人に一つか二つずつですけどね。全部だと作者になっちゃうんで。
あ、でもこの説明でいくと、綾花さんは少しイレギュラーになりますね。貴女には『過去の私』の思想を組み込んでいるので、今の私にとっては、さほど重要ではない部分ですね」
綾「でも、覚えてはいるのですね。ということは、昔作者は私のようだったのですか？」
作「それが違うんですよ。創ったころは、似たようなものだったのですが、色々な状況下にぶち込んで経過観察してみたら、委員長タイプになってました。作者は軽い対人恐怖症持ちなので、内心では綾花のようなことをぼやきつつ、傍観していることが多かったですね」
綾「それが、『かけ離れた』ということなのですね」
作「ええ、なかなか新鮮な体験？　ができましたよ。自分の感覚を持っていたはずのキャラクターが、自分と別のキャラクターになっていくのですからね～」
綾「気分良く話しているところ悪いのですけど、文字数見たらどうです？　作者さん」
作「もうこんなに書いてやがる！　本編もこれぐらいのペースで書ければいいのに……」
綾「本当にそうですね。次は速く書きあげてくださいよ？（じろり）

」
作「は、はい……がんばります。それではみなさん、また次回にお会いしましょう！　拙い作品を読んでくださり、ありがとうございました！　これからもよろしくお願いします！」

作「まだだ！　まだ終わってなーい！！」
綾「！？　どうしたのですか急に」
作「フフフ……ここから先は追加シナリオというやつですよ」
綾「……ほとんどの人が初見でしょうに」
作「たぶんそうでしょうね～　えっと、説明するとですね。私、大学の文芸サークルにて小説を書いていまして、そいつをちょっと修正して上げたのが本編ですね。あとがきはコピペです」
綾「いろいろ訳のわからない単語も出ていますからね。入部や、ガクホなんて単語、読者は首を傾げますよ？　修正して出した方がいいのでは？」
作「俺は面倒が嫌いなんだ」
綾「……ひどい作者ですね。ほかにも罪状はありますよ？」
作「……え？」
綾「しらばっくれないでください。早く書いてくださいって言ったのは確か五月のはずでしたよね？」
作「あ……えっと……」
綾「半年経ってやったことが一話を少し修正しただけをネットに掲載。で、二話の方はまだ半分も書いていない……と。何をしていたんですか」
作「……ネット、ゲーム、マ（ｒｙ　ですね」
綾（だめだこの作者……早くなんとかしないと……）
作「で、グダグダなったので、ネット掲載して評判を聞いてみよう

かなと思ったんですよ。読者の声が一つも聞こえないのは寂しいですからね」
綾「……言いたいことはそれだけですか？」
作「って、なぜ仁王立ちしているんですか……綾花さん？」
綾「なぜって……それはもちろんお仕置きですよ……あなたがさぼった半年間、鍛えていた甲斐がありました」
作「なお、ここに出てくる綾花はイメージであり本編とは一切関係がありま……」
綾「読者に親切をしてごまかそうという魂胆ですか？　そんなことをしても意味はないですよ……北斗……」
作「ちょっ！？　なんであなたがそれを使えるんですか！？　明らかにイメージあわな……　ってこっちにくるなァー！　ヤメロー！　シニタクナーイ！！」

う　わ　ば　ら　！

綾「お仕置きはしておきましたが、懲りずに遅くなる可能性もあります。そういう作者ですが、感想は待っているそうです。……ずうずうしい。では、いつになるかわかりませんが、次回までお別れです。ありがとうございました」

二章―1　紳士参上！（前書き）

大変遅くなり、申し訳ありません。今回、本作品を掲載するにあたり、重要な問題が起こったため掲載を中止していました。そのため、久々な上に文章が短いです。詳しくはあとがきで説明いたします。

さて、堅苦しいのはここまで！
本編どうぞ！

二章―1　紳士参上！

はじめのころ、この世界に境界はなかった
その世界の中で、私は、私でなくなった私の行動を見つめている。
のんきに話をしているみたいだけど、もう銀行閉まるまで時間ないわよ？
忘れているみたいね……仕方ないわ、少しだけ干渉しましょう。
流石に時計と通帳を持たせれば、気がつくわよね？

＊＊＊

少しばかり赤みのかかった太陽が、その坂を照らしていた。もう少し時期が早ければ、両脇に植えられた桜の花が映えていただろうが、今は葉ばかり茂っている。
その坂を慌てて駆けていく制服姿の女子がいた。元々乱雑だった茶髪をさらに振り乱して、彼女はその坂を駆けていく。しかし……
「ひゃあああああああああっ！？」
唐突に彼女はすっ転び、学生鞄の中身を豪快にばらまきながらゴロゴロと転がっていく。痛みをこらえながら彼女が立ちあがると、そこにはものの見事に散乱した教科書とノートの群れがあった。
「あわわわわ……時間がないのに～」
散乱した教科書を見てざっと青ざめるカエデ。すぐに拾い始めるが……あわてているせいか時折こぼしてしまう。そこに、通りかかっていた生徒の一人が素早く駆け寄り彼女の手伝いを始めた。
「大丈夫か？　手伝うＺＥ！」
「ほぇ？　誰かわからないけどありがとー」

思わぬ助け舟に驚きながらも、感謝の言葉をカエデは忘れない。
「だれとも仲良くしなさいと、そのために笑顔とお礼の言葉と、そして出来る範囲で困っている人を助けなさい」と誰かに言われたような気がするのだ。きっと両親の言葉だろう。カエデはそう思っている。
「俺は石川（いしかわ）宗司（そうじ）ってんだ、よろしくカエデちゃん」
「何で名前知ってるの！？　ハッ！？　まさか超能力者！？」
目を輝かせながらカエデは聞いたが、彼はどこか遠くを見つめながらつぶやく
「ハハハ……超能力か～あったらいいよなぁ」
「え？　違うの？　じゃあなんで？」
「カエデちゃんはちょっとした有名人だぜ？　二年や、三年の上級生もかわいいよな～って評判だ。狼には気をつけろよ？」
「そうですね、あなたみたいなのには特に」
「そうそうオレみたいな……って何言わせてんねん！」
何故か大阪弁でボケツッコミをやらかした宗司。しかし、言ったあとでふと思う。今の発言はカエデのものではない。では誰のものだ？　カエデの女友達だろうか？
「……」
謎の女性はどうやらノリが悪いらしい。何の返答もないせいで、俗に言う「滑った」時の空気が漂ってしまっていた。内心やらかした！　と思いながらも、こういう状況下ではいかんせん話しだしずらい。
「あれ？　綾花ちゃん！？　どうしてここに！？」
そんな空気を気にもとめず……というより、その空気を全く読めないカエデは、綾花がここに来ていることに驚いていた。
「自己紹介がまだでしたので、帰りながらしようということになったのです。それで追いかけてみたらこのありさまですよ。で、あなたは誰ですか？」
キツイ口調で、半眼で宗司を睨みつけながら女性は言い放つ。…

…ここはガツンと決めてやろう。彼は胸の内でつぶやき、親指で自身を指さしながら胸を張り
「通りすがりの紳士だ」
びしり！　と宗司はいってのける。が、先ほどより彼に向けられる視線は鋭い……というより、不審者を見る目つきへと変わっていて、
「……警察を呼んだ方がよさそうですね」
完全に逆効果となっていた。
「いやいやいや！　なんでそうなるよ！？」
「自身を紳士と名乗る方に碌な人間はいません。それは、『自分は正直ものです』と言っているようなものですよ？」
反論ができない。完璧な理論武装である。彼女の話し方をみて、失敗したと宗司は思った。こういう生真面目なタイプはきっちりし過ぎていて、ほどよい冗談を交えながらの会話が通じない。議会や会議の進行役にすると、話題をまとめながら進めてくれるのでありがたいが、文化祭などの司会にするとクラスが萎えるだろう。そして、こういう人間は話がこじれると非常に面倒で、誤解を解くには細かい説明がいる。
「助けてくれたことは確かよ」
「おお！　カエデちゃんマジ天使！」
そのための言葉を思い浮かべている時に、助けた彼女がぼそりと言ってくれた。思わず本音がこぼれる。これで弁解しなくてもよくなったと、彼は安堵した。
「えへへ～それほどでも～……ってあれ？　私何か言ったっけ？」
ところが、カエデは何故か混乱していた。首をかしげながらきょろきょろしている。
「健忘症か？　あるいは若年性アルツハイマーかもな」
また別のだれかが発言する。彼女を追いかけてきた部員だろうが、ずいぶんなもの言いだと思った宗司は、今度こそ、ガツンと決めるべきだろうと

「おいおいそんなこと滅多に……っ！？」
『滅多にないだろうし冗談でも、んなこというんじゃない』そう言おうとして……発言した人物を見て絶句した。
彼は、同じクラスの学友であり、
有名人であり、
異端であり、
様々な意味でこの学校の頂点に君臨する男――
二年三組　出席番号１９番　酒月　日明がそこにいた。

二章―1　紳士参上！（後書き）

作「ちょりーす！　作者でーす」
カエデ「ちょりーす　……じゃないよ作者さん！　すっごく遅いよ！！　綾花ちゃんにお仕置きされたのに懲りてないね！！」
作「今回は結構真剣に問題が起こったんです」
カ「ほぇ？　どんな？」
作「この小説のキーワード見てもらえば想像できるかもしれないけど、この小説はそのうち能力者同士のバトルをやる予定があったのですが……使う予定の能力がほかの小説とかぶってしまいまして……」
カ「ざ・わーるど！　とか？」
作「時間制御系の能力なら、昔からある強力な能力の一つですし、使用者も何人か存在しているのでさほど問題にはならないのですが……やっかいなことに、『とある～～の～～～～』という今人気絶頂のシリーズのだったんです」
カ「でも、自分で考えた能力だったんでしょ？　なら使っちゃえば……」
作「友人にこのアイデアをいったら、『これパクリじゃん』って言われて、それでそのシリーズを読んでみたら……能力の応用や考察、弱点の研究まで突き詰められていたんです。タイミングはともかく、出来が元ネタ以下ではどうしようもありません」
カ「む、むぅ」
作「作者にも衝撃でしたよ？　おれのかんがえたさいきょうののうりょく！　がすでに類似したものがあって、それがどうあがいても作者の表現力や考察力の及ばない領域に達していたのですから。おかげでこの小説（げんそう）がぶち殺されましたよｏｒｚ　ほかにも、テストがあったり、モンハン買ったり、バイトやったり、ディシディア　ディオディシムやったりで大変だったんです」

カ「うち二つ関係ないのが混ざっているような……」
作「いえ、小説書くのに関係ないのは一つだけです。ディシディアは大事でした」
カ「え？　だってゲームでしょ？」
作「そうなんですけどね。……通信回線使ってで読者さんと対戦したんですよ。この名前で登録していたので、相手の人が、『書いてる人？』って聞いてきてくれたんです」
カ「そーなのかー」
作「……こんな小説でも見てくれる人がいるってわかったら、元気が出ましてね！　無計画上等でも、書いていこうかと思ったんですよ。対戦してくれた方。ありがとうございました！　また遅くなるかもしれませんが、楽しんでいただければ幸いです」
カ「イイハナシダナー」

カ「このメモ……どうしよう？　この空気で作者さんに見せるわけにはいかないよね？　読者さんにはこっそり見せるね」

綾花からのメモ

……下手したら本編より多いあとがきを見てくださっているみなさん。投稿が遅れてしまい申し訳ありません。今回もお仕置きをしようかと考えているのですが、どうでしょう？　以下の選択肢から選んでください。なお、本編とは関係ないアンケートですので、気楽にどうぞ

1、お仕置きなし

2、お説教
3、次回まで竿巻きにして木にぶら下げる
4、ウイルスでジワジワ……
5、斬刑に処す

回想ー1　日明の功績（前書き）

早めに投稿しようとした結果がこれだよ！！　Ｏｒｚ
短いし内容薄くてごめんね！！

回想―1　日明の功績

石原　宗司が、日明という存在がどういうものかを認識したのは、去年の夏のことだった。

この時点で、もう「酒月　日明」は有名になっていたが、彼を気に入らないものも多く、敵視する勢力も多かった。否――彼を排他しようという人間がほとんどだっただろう。

教師たちは、彼のことをよく思っていなかった。眠ったように机にたたずんでいるかと思い、問題を解かしてみると必ず当ててくる。無駄口を叩かないのはありがたいものの、面白くはない。クラスメイトからすれば、何もしていないのに問題が解け、おまけに何かを話すことは少なく、いつも一人でいるので、気味が悪いし、何より妬ましく見えていた。

そのためクラスでも孤立し、彼は一人でいることが多くなっていた。だが、直接的に彼をどうかしようとするものはいなかった。ふくろ叩きにしようと思えば逆にそのグループが壊滅し、いやみを言っても、至って普通の反応で返されてしまうからである。それでいて何より不気味なのは……日明の態度は、普段と何ら変わりがないことなのだ。

そう……彼は周りから疎まれようが、いやがらせを受けようが、その態度を一度たりとも変えることがない。誰かと話すとしても必要最低限のことしか喋らず、視線はどこか虚ろなようで、それでいてしっかりと見つめてくる。約一名の例外がいたが、その人物を除いて、皆が酒月　日明を異端扱いし、畏れ、遠ざけていた。

そんなある日……夏休みの直前に、一つの事件が起こる。それは、シンプルに言えば酒月　日明をシメようと言うものだったのだが……規模が今までの比ではなかった。

対立していた不良組織、他校で縄張り争いをしていたメンバー、

日明にメンツを潰された成績優等性……本来ならいがみあい蔑み合う関係の面々が、彼を倒すために手を取り合い集結したのである。その数、およそ百三十名……そのメンバーの中に　石川　宗司もいた。が、彼は日明を倒すための実動部隊ではなく、日明を倒すための場所の確保と、戦闘が始まったときに警察などの邪魔が入らないよう、見張りをする役目だった。

他の裏方役とも相談し、日明との決戦の舞台は廃工場内に決まった。そこそこ広く、戦闘を行う部隊約１１０名が隠れることができ、さらには建物付近には青いコンテナが大量に放棄されっぱなしになっているおかげで人目にもつきにくい。場合によっては、この物陰から奇襲することもできると、最高の立地である。戦闘区域が決まると作戦会議まで行われた。優等生組の中にいた戦術、戦略マニア、さらには不良組の戦闘スキルや経験を考慮した、本格的な作戦が練られた。

そして作戦決行から一時間後、宗司が見たものは――

無数に倒れた仲間たちと、その中心で独りたたずむ「普段通り」の酒月　日明の姿だった。

回想ー1　日明の功績（後書き）

作者「今回は頑張って早めに更新したぞー！」
宗司「でも短けぇ……しかもセリフ一つもないってどういうことだよ！」
作「いや～ここらあたりで、日明君がどういうやつか書いておかないとまずいと思いまして……作者の脳内では無双状態だったし、設定当初から今までの間で、一番イメージの変化がなかったんですよね。でも、それが今回はそれがあだになりました。危ない危ない」
宗「キャラが定まってていいことじゃねぇの？」
作「基本的にはそうですね。ただ、具体的にどういうやつか書いていかないと、読者さんがおいてけぼりになっちゃうんですよ」
宗「つまり、なんだ？　作者と読者との間で、キャラの認識にズレが出ちまうってことでＯＫ？」
作「その通り、正解した宗司君にジュースをおごってやろう」
宗「一番いいドクターペッパーを頼む」
作「ずいぶんマニアックなものを……」
宗「そういうあんたはネタを融合させるな！　それはともかく、例のアンケートが溜まってないが、二章終盤で集計するらしいぞ。ゆっくり選んでいってね！」
作「？　おまえは何を言ってるんだ？」
宗（あ～そっか。作者は見ていないんだっけ？　かわいそうな遊……じゃなくて、かわいそうな作者……）
作「無視か！？　無視なのか！？」

二章―2　お守りと大仏サマ（前書き）

なんとか、一か月更新なしは阻止できた……
こんな作者だが、大丈夫か？（オイ

二章―2　お守りと大仏サマ

身体がどっと、嫌な汗をかいた。心音がはっきりと聞こえ始める。
何をしたのでもなく、何をされた訳でもない。それでも……『彼』はそこにいるだけで周囲の人間を委縮される。それだけの伝説と功績と逸話を、彼は持っているのだ。
「日明先輩、もう追いついたのですか……さすがですね」
メガネレディーの発言も水の中で聞いた音のように、ぼんやりとしていてひどく遠くに感じる。思考がまとまらないせいで、発言の意味もほとんどわからない。
「どうしたのですか？　急に黙り込んで」
となりから話しかけられ、「ヒャア！？」などと悲鳴をあげながらも、
「だだだ黙り込んでねぇし！　ちょっと『鬼神』に遭遇してビビっただけだし！」
辛うじて、返事をすることができた。
だが同時に、彼は墓穴を掘ってしまっている。
「日明先輩……彼になにかしたのですか？」
キリリとメガネを吊り上げて、彼女は問い詰める。そして宗司は、自身の失敗に気がついた。基本的に日明は、学校で暴れたりすることはない。虚ろな瞳で何かを眺めているか、誰かの頼まれごとぐらいしかしないのである。そう、彼が暴力を振るうのは――
「何かしたとするならば、その前に私が何かされかけたのだろうな。私は自身から仕掛けることはまずない。何らかの戦闘技能に優れているような者なら、真剣勝負をすることはあるが……この者はそうではないな」
淡々と日明は告げ、彼女は渋い顔をした。
そう、彼は自身に危害を加えようとしたものには何の容赦もしないが、そうでなければ特に何もしないのだ。これで宗司が『鬼神』

にちょっかいをかけたであろうことが、彼女に伝わったことになる。
（まいったな～こりゃ）
非常に雰囲気が悪いが、どうしようもないように思える。かつて手を出したのは間違いなく宗司で、それを叩きのめしたのが日明なのだ。いかに彼が人外じみていても、道理は彼の味方である以上、マジメメガネは助け舟を出してくれないだろう。
そんな淀んだ空気を、吹き飛ばすかのように――
「今は昔のことなんて関係ないよ～ここにいるのは、私を助けてくれた……えっと、紳士だよ！」
ふんわりと、自分が助けた彼女が言った。
「紳士？　スーツもシルクハットも、蝶ネクタイもヒゲもないのにか？」
「さすがにそれは……古すぎませんか？」
そっと、辺りを包んでいたいやなモノが霧散してく気がした。
「名前覚えてくれよ、カエデちゃん！　オレの名前は石原　宗司！　次は忘れないでくれよ！　接客業でこれやったら大チョンボだぜ！？」
その流れに乗るように、わざと機嫌悪そうに宗司はいう。内心は彼女に感謝しながら……
「い・し・は・ら・そ・う・じ君！　うん！　覚えた！！　ごめんね～私よく記憶が飛んじゃうんだ～って、あれ？」
「？　どうしたん？」
不意に上着の内側をまさぐり、きょろきょろとあたりを見回すカエデ。そして……あっという間に顔が青くなっていく。
「ない……？　お守りがない……！？」
「お守り？　特に珍しいものでもない……」
「あれがないと……だめ！　探して！」
日明の問いかけを遮って、カエデは叫ぶ。急に取り乱した彼女に、三人は混乱した。宗司は知るよしもないが、その慌て方は銀行に行こうと飛び出した時以上の慌てぶりである。

宗司はわけもわからず思わず後ずさり……
カラン……
と、乾いた音が響いた。
「……？」
足元に視線を向けると、長細い木の棒のようなものが転がっていた。どうやらこれにぶつけたらしい。手にとってみると――
重い。と感じた。
それは、見た目に対する重量――物理的な意味での、ただの木の棒としての重量でもそうなのだが――何か、不吉な重圧なようなモノも感じる。これではお守りというより、呪いのアイテムと言われた方がしっくりきそうだ。
「もしかして……これか？」
たぶん違うだろうと思って差し出したが、カエデはソレを見た瞬間、宗司の手の中にあったモノを奪うようにかっさらい、まじまじと見つめる。次にくるりと回し、手でその感触を味わい、一つこくりとうなずいて……
「良かった～　ありがとねっ♪」
宗司ににっこりと、太陽の光を受けたひまわりのような笑顔を向けた。
（ぐはぁ！　こいつは……強力すぎる……！）
まぶしい。あまりにもまぶしい笑顔に思わず顔を手で覆いたくなる。穢れを知らない無垢な微笑みに、宗司はたじろぎ、心をわしづかみにされた。
「……お守りとしては無骨なものだな」
「日明先輩……ＫＹという言葉を知っていますか？」
「む……」
無粋な「鬼神」のツッコミに、メガネレディーの辛辣な一言が刺さる。おかげで、甘い青春気分が台無しにされてしまった。
しかし、こうして会話を聞いていると、「鬼神」の感性は相当ズレている。一般的な人間の発想ではない。と、思っていると、ある

言葉が宗司の頭をよぎった。
最近よく聞く言葉に、「天才と変人は紙一重だ」という言葉がある。
紛れもなく、「鬼神」は天才の領域にいる訳で――つまり、変人に近いということであり――そんな人物が『マトモな感性を持ち合わせている』と考えること自体がおかしいのかもしれない。あの事件のせいで彼の印象を宗司は決めてしまっていたが、少しばかりイメージを修正する必要があるだろう。最も、どうイメージを修正しても、彼が化物であることには変わりがないだろうが。
などと、ぼんやり考えると「おーい！　何してるー！？」と、駆け寄りながら男子生徒が寄ってきた。そいつは……
「大仏（だいぶつ）サマじゃねーか。なんで？」
近づいてくる彼は、学校でも「鬼神」とは別の意味で有名な人間である。特に警戒する必要のない相手だが、少なくとも宗司との接点はない。
「大仏様……？　有名なのですか？」
ぼそりとつぶやいたその言葉を、委員長っぽいのが聞いていたらしい。隠すようなことでもないので、宗司はそれに答えた。
「ああ、まあそれなりにな。なんでも、困っている人間を見捨てられないらしいぜ。特に『孤立』した奴は放っておけないそうだ。それでいて性格も良いのと……あいつ、『オサラギ　シュンヤ』って名前なんだが、オサラギは漢字で書くと『大仏』ってなるもんだから、そのまま『大仏サマ』ってあだ名になってる」
実例としては、日明が一人孤立していた時、敵意を向けなかったことだ。今も時折一緒にいる姿を見かけることから、仲はそれなりに良いのだろう。
「駿也か。遅い。綾花と共にいたのではないのか？」
「……教室にカバン忘れてた。鍵かけなおしたりしてたら時間食ったんだよ。ところで、なんでこんなところで話してるのさ。時間大丈夫？　銀行しまるんじゃ？」

「「「あ」」」
三人は同時に、間抜けな声を上げた。そして……
「あばばっばばばばばばああああっ！！」
カエデ奇声を発し、顔色を白黒させる。よほど重要な用事か何かなのだろうか？
「そそそそ宗司君！！　ごめんね！　これから私、お金下ろさなきゃいけないからー！　今日はほんとにありがとね！　またね！！」
「ちょっ！　待てやぁ！！」
唐突にカエデは走り去ろうとし、宗司は反射的に彼女を追いかけていた。
正直、今の会話の内容はよく理解できない。「鬼神」「メガネ委員長」「大仏サマ」「カエデ」の四人に何らかの接点はありそうということぐらいだ。
状況も特に読めているわけでもない。ただ本当に、「巻き込まれた」だけ。
それでも――
この奇妙な偶然を、宗司はそれだけで終わらせたくなかった。

二章―2　お守りと大仏サマ（後書き）

作者「あ、危なかった……一か月更新してませんつくまであと二日しかなかった……」
日明「……ある意味アウトだろう？　五月中旬の感想の返信が終わった後、これだけ時間をかけてもこの量と質だ」
作「うぐぐ……なんだろう、もうあとがきが作者の言い訳と贖罪コーナーのような気がしてきました」
日「なら、そうならなくても良いようなモノを書けるようになるのだな。少なくとも、我々にダメ出しされているうちは論外だ」
作「うひぃ……こんな所で『鬼』にならないでください」
日「読者の方々も、この者を甘やかさないようにしてもらえると助かる。もちろん、感想等でほめて頂けるのはありがたいのだが、それだけではこいつは怠けかねん……しかし、大筋は決めてあるので、そこは安心してほしい」
作「まぁ、そうなんですよね。本当はもっと早く二章を進める予定でしたが、キャラクターの皆さんを、作者の中で自然に動かさないとどうにも調子が狂ってしまうのですよね」
日「読者の皆に分かるように説明すると、作者は台本を書いて我々に渡している。それを我々が演じるのだが、その時々でアドリブが発生することが多々あるわけだ。そして、そのアドリブを小説という形で、作者がまとめると言ったところか」
作「ただ、かなりの高確率で台本がブチ壊しになるんですよね。しかも容量が割増しになっているという……キャラが安定しているおかげで重要な部分がブレにくく、伏線を張りやすいのはありがたいのですが」
日「まとめられないのは文章力、及びコミュニケーション能力不足が原因だろうな。よくそんなステータスで小説を書こうと思ったな」
作「妄想すること自体は得意分野なんですよ！　だから小説も書け

るだろうと思ったのですが……ごらんのありさまだよ！　チキショーメー！！　これから小説を書こうとしているみなさんへ！　軽い気持ちで小説書こうとか思うなよ！？　絶対に思うなよ！？」

日「……ネタが古くないか」

作「お・前・が・言・う・な！」

二章ー3　襲来（前書き）

駿也「ま　た　一　カ　月　か　！」
作者「……すいません」
駿「あれ？　言い訳しないの？」
作「これだけやってるとね……もう反論する元気もありませんよ」
駿「……？　普段と様子違うけどどうした？」
作「何、今月の始まりに、祖母が亡くなっただけですよ。そのあとの疲れがまだ抜けきってないだけです。もうすぐ一カ月立つってのにね」
駿（それで元気ないのか……まぁそれなら仕方がな……）
作「某弾幕シューティングにハマってたのもありますがね！」
駿「その一言で台なしだよ！！」

二章ー3　襲来

「つ、ついたー！　時間は！？　十分前！！　間に合った～」
駅からやや離れた、とある銀行の前で木下カエデは息を荒くしながら言った。少しだけ息を整えてから入ろうか。そう思い、建物の前で休んでいると……一人の学生が話しかけてきた。
「女性にしては早いな、カエデ」
彼女が振り向くと、男子生徒が立っていた。息一つ切らさずに話す彼は、カエデの全力疾走を追いかけた後とは思えない。
「そういう日明先パイも早いよ！　何で息切らしてないの！？」
「日々修練の賜物だ。カエデもやるか？」
「ん～いいや。今のままで」
やんわりと先輩の申し出を彼女は断った。別に彼のように超人になりたいわけではない。などと思っていると、遠くから三つの人影が迫って来ていた。徐々にこちらに寄ってくるそれは、彼らが見知っている制服を纏っている。
「やっと……追いついた！」
「二人とも早過ぎ！　日明は当然として、カエデさんも早いよ！？」
三人は近付くや否や、内二人は各々の言葉を口にする。唯一の女性である三人目に関しては、息も絶え絶えで口もきけない状態だった。
「そお～えへへ～」
「褒めて……ませ…ん…よ」
照れるカエデに、息を荒くしながらツッコミを入れる綾花。今にも崩れそうな彼女に、駿也は肩を貸していた。そのまま五人は、銀行内へと入っていく。
「じゃあ行ってくるね～ちょっと待っててね～」
ようやく目的地へと到着したカエデは、ＡＴＭに向かっていく。残された四人も、これで一息つくことができるだろう。

「なんとか……間に合ってよかったですね……」
「そうだね。そそっかしかったけど、なんとかなった」
「全くだ」
オカルト研究部の三人は、やや愚痴気味にこぼしつつ、カエデが時間に間に合ったことを良く思っていた。が、
「えっと、話しているところ悪いんだが……どういう状況なんだ？」
部に参加していない宗司は、なにがなにやらさっぱりだった。
「仕方ないですね……説明しましょう」
そして宗司は、ようやく彼女が急いでいたのと、この四人が一緒に行動していた理由を知ることになる。
「へぇ……オカルト研究部ねぇ……今度学校来る時俺も入部していいか？　やることなくてヒマしてたんだよ」
「……カエデさんが目的じゃないでしょうね？」
「ＨＡＨＡＨＡ！　そんな訳……すいませんちょっと下心ありますごめんなさい」
さらりと流そうとして……綾花にジト目で睨まれてしまい、すぐに頭を下げる羽目になった。
「終わったよーみんなごめんね～付き合わせちゃって」
「気にしないでください。それでは帰りま……」
「おっと、そこの君たち。すまないが少々出て行くのを待ってもらえるかね？」
「え？」
カエデがお金を下ろし終わり、綾花が帰ろうとしたところ……誰かが五人に声をかけた。他人行儀でありながら、不快感を感じさせない丁寧な口調で話しかけられ、そっと振り向くと……そこには、金髪の男性が黒い塊を……『拳銃』を構えて立っていた。

二章ー3　襲来（後書き）

ピチューン！！

作者「あ、またやられた……」

駿也「頼む、あとがきぐらいしっかり進行してくれ……」

作「おっと、失礼しました。いや～昔のシューティングゲームばっかりやっていたもので、弾幕シューティングをやったことがなかったのですが、これはなかなか新鮮ですねぇ……」

駿「そんな年じゃないでしょうがあんたは。てか、作者の年だともう弾幕シューぐらいしかなかったんじゃ？」

作「そうですねぇ……ゲーセンにはその手のしかなくなってましたね。中古ショップで古いの買ってよく遊んでます。意外とイケるもんですよ。最近のはグラフィックばっかり凝ってて中身がスカスカのとかありますから」

駿「前から思ってたんだが……あんた、重度のゲーム好きだよな？」

作「あはは……でもＲＰＧが大の苦手という、かなりの偏食家ですがね。あ、そうそう、ここでちょっとしたお知らせがあります」

駿「まさか打ち切り？」

作「いやいや、こちらはこちらで進めますが……先ほど話題になった作品の二次創作を始めました」

駿「は！？　こっち進められてないのに何やってるし！？　てか、まだ一作品しかプレイしてないだろーに！」

作「知っている方は暇つぶしにつまんでくださいな。これは予想ですが、多分二次創作のほうがペース速くなると思います」

駿「オィイ！？」

作「いや、だって二次はもうほとんどキャラができているんだもの。たとえるなら二次創作は設定というパーツを組み立てるプラモデルで、独自設定やオリジナルキャラクターで塗装してオリジナリティ

を出す。自身で創作して作る小説は、まずそのパーツや塗装から細かく設計して組み立てなきゃいけなくて、ズレが出たら最悪一から組み立てなおさなきゃいけないって感じですな。」
駿「わかるような、わからないようなたとえだな……」
作「だから、二次創作のほうが圧倒的に難易度が下がるんですよ。そもそも、その作品を知っている人に向けて書くわけですから、さらに難易度は下がります。二次書ける人でも、一からオリジナルは無理！！　って方も結構いるのではないのでしょうか？」
駿「でも、ちゃんとこっちも更新してくれよ？」
作「善処させていただきます！（キリッ」
駿（し、信用ならねぇ……）

二章ー４　お守りの正体（前書き）

作者以外全員「ま・た・遅・い・更・新・か・！」
作者「それが作者クオリティ……ってのわーっ！？」
日明「二次創作は一時、一日一回更新していたではないか！　どうしてその集中力をこちらに使わん！？」
作「な、何を言ってるんだ日明君！　二次とオリジナルの難易度は天と地の差が存在しているのだよ！！　それにあっちのが、読者さん多いし……モチベーションが保ち易かったといいますか……」
綾花「以前の半年後投稿より大分マシですが……やる気あるのですか？」
作「微妙。最近かなり鬱い」
宗司「うおぃ！！　しっかりしてくれよ！？　この小説書けるのお前だけなんだからな！？」
作「いや～キャラは出来てるのですがね……いやーかなり鬱いわ～」
カエデ「ん？　何これ……『剣○魔法○学園モノ２』？」
作「げっ！　タンマタンマ！！　それはらめぇー！！」
駿也「……ほんとに好きだよね、ゲーム」
作「ハハハ……アーケードゲーもよくやりますな。ＢＢＡＢで『テッテレ王子』って名前で、ＬｏＶ：ＲＥ：２だと最近カード無くしたんで、『リューイチ』という名前で再開しようｋ」
全員「小説書けよ！？」
作「でも、鬱気味なのは本当だよ！　よ！？」
全員「説得力皆無！！」

二章ー４　お守りの正体

「君たちは実に運が悪い。もう少し早く出ていけば我々に遭遇しなかっただろうし、来るのが遅ければ、そもそもここに入ってこれなかったのだろうからね」
　飄々と語るは、駿也たちに話しかけてきた金髪の男だ。何人かのグループでの犯行だったらしく、覆面をした二人組が、窓口の係員に拳銃を突きつけていた。他にも覆面をした者が二人おり、この金髪男はリーダー各らしく、他のメンバーに指示を出していた。
「このご時世に銀行強盗か。リスクとリターンがつり合っていないぞ？」
「ご心配どうも。それは、携帯電話で通報できるから……かな？甘いね。電波の状態を見てみたまえ」
「……！？」
　宗司が確認すると……そこには「圏外」の二文字が表示されている。綾花たちや他の巻き込まれた客も含めて、全員の電話が通じない状態らしい。
「どうして……！？」
「なに、オレオレ詐欺というのが流行っていただろう？　それの対策で、銀行では電波が通じない状態になっているのさ。係員が制御しているだろうけど……通じさせる気はないよ。残念だったね」
　人をからかう様に言ってのける金髪強盗。日明は一つ舌打ちし、その場に座り込む。さすがの彼にも打つ手がないらしい。
「え？　うそぉ！？　強盗！？　強盗なの！？」
　一人混乱し、大声で騒ぎたてるカエデ。その様子を好ましく思わなかった犯人の一人が怒鳴り散らした。
「うるせぇ！　騒がしくしてっと、無理矢理黙らせるぞ！！」
「あわわわわ……！」
　ところが、全くの逆効果になってしまってるようだ。脅されたカ

エデは、ますます慌てふためいている。
「黙れ」
「ホウっ！？」
全く別の覆面をした男が、カエデの背後に回り込み殴って気絶させた。
彼女が黙りこんだのを見て、唯一覆面をしていない金髪の男が、銃を掲げて宣言した。
「……我々もできれば穏便に済ませたい。手間取らせなければすぐ終わるから、少々待っていてくれたまえ。そうそう――」
掲げていた銃の引き金を引く。火薬の破裂音と共に、天井の壁が欠けた。少し間をおいてからキン、と。空薬莢の音が響く。
「この銃は本物だ。今は使わなかったからと言って、変な気を起こさないように」
静かに目を細めて、店内の人間に忠告する。……中にいる人々は、抵抗する気も失せたようで、俯いたまま黙り込んでしまった。
銃声が聞こえていたのだろうか。外にいたカラスが、鳴きながら羽ばたいてく。ひどく不吉な予兆に、思わず宗司は日明に耳打ちした。
（……『鬼神』、どうにかできねぇか？）
無数の生徒相手に、無傷で帰ってきた逸話を持つ彼なら、なんとかなるのではという期待を込めて聞いたのだが……
（……無理だな。この場にいるのが私と、誰か一人ぐらいなら問題ないが……人質全員を守りきる自信は無い。犯人五人を黙らせる間に、犠牲が出る可能性がある。……もう二人ぐらい手慣れがいるなら、仕掛けても良いのだが）
返ってきた答えは、あまり良いものではなかった。……それでも、『一人なら倒せる』と言っている辺りは流石といったところか。
（大丈夫。手は打ったから。しばらくすれば警察が来るはずだから、ちょっと待ってて）
二人でコソコソと話していた所に、視線は向けずに駿也が呟い

た。連絡を入れたらしいが、一体どうやったのだろう？
　と、宗司が考えていたときに……
「ようやく眠れると思ったら……これはどういう状況なのかしら？」
　気絶していたはずのカエデがむくりと立ち上がり、本当に不機嫌そうにつぶやいた。
「あ？　てめぇ……今の立場わかっていっているのか？」
　先程もカエデを脅していた強盗が、彼女に突っかかる。どうも、この犯人にカエデは嫌われたらしい。
「ごめんなさい。解ってないわ。だって少し前から眠ってたんですもの。ああ、でもあなたに理解できるわけないわ」
「馬鹿にしてんのか！　眉間にブチこむぞ！！」
　激昂し、銃を楓（かえで）にむける犯人。それを見て彼女はきょとんとし――
「それは……銃？　本物……？　ぷっ、くくく……アハハハハッハハ！！」
嗤った、ひどく愉快そうに。聞いている身としては、ひどく不快で不吉で不穏な笑い声を上げて。……先ほどのカエデの反応とまるで違う。
「何がおかしい！？」と、犯人は銃口を押し出すように楓に向けるも……その言葉はひどく虚しく響いた。それを無視して、楓は続ける。
「とっても愉快だわ！　カバンをぶちまけた時はどうなる事かと思ったけど。こんなイベントが待っていたのなら運がいいわね！！ああ、違うわね。今日という日がひどく幸運なんだわ……面白そうな部があったから誘導して、その結果でこうなっているんだから……綾花さんだったかしら？　あなたには感謝しますわ。この因果を作ってくれて――」
　そう言うと、綾花に向かって微笑みかける。その笑みは、先ほどまでのカエデと印象が違いすぎた。幼い感じの笑みだったのが、顔つきは同じはずなのに、今は大人びた……妖艶な雰囲気を醸し出していて、それを見た綾花は困惑している。

「死にてぇのかてめぇ！」
「それは困るわ。……ああ、そうだ。今のだとどうして私が愉快だと言った説明、してないわね。ま、気が付かれると私が困るのだけど」
　とても銃口を突き付けられた人間の行動とは思えない。楓は命が惜しくないのだろうかとも思ったが、今の発言を考えるとそういう訳でもなさそうである。
「ねえ、あなた……誰かを殺せる状況ということは――」
　不意に、楓が制服の内側に手を突っ込んだ。同時に、犯人へと距離を詰める。
　淀みのない動作で迫り、誰も彼女の動きに反応できない。そのまま胸に飛び込むような形で強盗にぶつかり――

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーサクッ……

　湿った音が、一つ響いて――
「――誰かに殺されても、文句は言えないのよ？　今度からは殺意を向けたら、とっとと相手を殺すように心がけなさい？」
「あ……え……？」
　訳も分からない様子で、小さく声が漏らす。腹部辺りには、赤黒い染みが広がっていって、その中心には……彼女が「お守り」と呼んでいた物が付きたてられていた。
　よく見ると、それはお守りなどではなく――鈍く光る、冷たい金属。鋭いナイフが、彼女の手には握られていた。

二章ー４　お守りの正体（後書き）

駿也「半端なとこで切ったね」
作者「その方が、読者さんの妄想を掻き立てることがデキルノデス」
駿「でも、更新早くしてよ！　カエデさんがどうなったか気になるし」
作「伏線はちゃんと張ってるし、よくあることだから分かってる人も多いでしょうな。ただ……そこまで単純な物じゃないとは言っておきましょうかね」
駿「気になるなぁ……それともう一つあったんだけど、僕の口調変わってるよね？　ミス？」
作「伏線です。諸事情により、ちょっと強引な修正でもありましたが……なら伏線にしてしまえば良いと思って」
駿「それ言っていいの？」
作「……多分、回収は早めにするつもりですし」
駿「ネタが割れる前に、更新してよ！？」
作「……あえてノーコメントで」
駿「ちょっ！？　それはどういうこt」
作「ではまた次回☆」
駿「に、逃げるなーっ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7439o/

広イセカイと狭イテノヒラ

2011年9月17日20時48分発行